

神戸周著『ブラジルの民衆舞踊 パッソの文化研究』

井上 淳生

「ブラジルの踊り」というとき、おそらく日本で多くの人が想起するもののひとつに「カーニバル」があるだろう。本書では、現地の公用語であるポルトガル語の発音に忠実に「カルナヴァル (Carnaval)」と表記し、カルナヴァルに花開く音楽であるフレーヴォ (Frevô), そして、そのなかでもとりわけ目を引くパッソ (Passo) という踊りに焦点が当てられる。

フレーヴォとは「カルナヴァル団体の街頭行進という脈絡において演奏される音楽とそれに合わせて踊られるダンス、そして熱狂的な群衆の存在」(p.6) の総合である。フレーヴォは、2007年にブラジル無形文化遺産への登録、2012年にユネスコ人類無形文化遺産への登録を果たしており、2016年のリオ五輪での閉会式で披露されるなど、今やブラジルを代表する民衆芸能のひとつとなっている。

そのフレーヴォを構成する踊りがパッソである。パッソとは、ソンプリーニャ (sombriinha) と呼ばれる、直径が50センチメートルに満たないカラフルな小型の雨傘を使った軽快な踊りであり、現在は国内の街頭や劇場に留まらず国際的なコンクールでも演じられている。

本書の舞台となるのは、ブラジル連邦共和国の最東端に位置する都市、レシーフェである。ペルナンブーコ州の首都にして「南米のヴェネチア」の異名をとる。かつての植民者であるポルトガル人と、彼らが到着する前からこの地に暮らしていたブラジル先住民、そして砂糖生産のための労働力としてアフリカから強制連行された黒人奴隷という3つの文化的出自が、フレーヴォ、そしてパッソに色濃く反映している。

本書は、著者が2018年に早稲田大学大学院スポーツ科学研究科に提出した博士学位審査論文を加筆・修正したものである。筆者とフレーヴォとの関係は15年以上にわたり、とりわけ直近に実施した長期のフィールドワークは2015年10月から2016年9月までの1年におよぶ。本書はこれまで手薄であった、フレーヴォのダンス、パッソに関する歴史的ならびに技術的分析の賜物であると同時に、パッソという窓からレシーフェにおける文化行政の変遷を描いたエスノグラフィーでもある。

本書は、序章に続く4つの章と終章で構成されている。第1章ではレシーフェのカルナヴァルにフレーヴォとパッソが登場する歴史的経緯が検証され、第2章では、現在のパッソの指導における「学校」という枠組みの開発に道を開いたナシメント・ド・パッソの功績が分析されている。続く第3、4章では、彼の理念を受け継ぐ2つの異なる組織の活動の実態が検討されており、全体として、レシーフェにおけるパッソの指導、継承に関する通時的かつ共時的な分析が本書の内容となっ

ている。以下、評者の所感を交えつつ順に見ていきたい。

第1章「フレーヴォの誕生」では、レシーフェのカルナヴァルにフレーヴォとパッソが登場する歴史的経緯が、先行研究や新聞資料等の精査に基づいて論じられている。

ここでは、フレーヴォの場となるカルナヴァルが、ポルトガルからもたらされたエントウルード (Entrudo) と呼ばれる「無秩序で破壊的な祝祭形態」に起源を有することから説き起こされている。「気晴らし」としてのエントウルードは、「街頭」と「経済的富裕層の邸宅」という互いに異なる2つの社会空間で行われていた。両者は相互に干渉し、絡み合うことを通じて、カルナヴァルの秩序化が進められてきた。その過程で、テンポの加速化、歌詞の喪失を経て、フレーヴォという音楽が誕生したこと、そして、19世紀末から20世紀初頭にかけて、「街頭」という空間を共有した楽隊と、「楽隊の前方で棍棒を片手に敵対する集団を挑発するならず者たち」(p.45) と評されたカポエイラたちとの相互作用を通じてパッソという踊りがその姿を現すようになった経緯が描かれている。とりわけ興味深い点は、武術のダンスへの「偽装」に触れた箇所である。カポエイラたちは当局からの取り締まりをすり抜けるために、自らの武術的な身体動作をダンスに見せかけたというのである。

第2章「ナシメント・ド・パッソとフレーヴォ」では、パッソの継承に果たしたナシメント・ド・パッソの功績と、彼の指導法や理念を発展的に継承した現在の指導の実態が検討されている。ここでは、1950年代以降の民衆文化への関心の高まりと関連付けながら、ナシメント・ド・パッソが、パッソの世界において頭角を現していく過程が振り返られている。パッソを覆う社会情勢として、具体的には、レコード会社の設立とコンテストの導入、外来のダンスの身体技法の吸収と解釈、フレーヴォの存在を脅かし始めるリオデジャネイロ出身のカルナヴァル団体、エスコーラ・ヂ・サンバの台頭 (1960年代) が指摘されている。このようななか、ナシメント・ド・パッソは1966年に「パッソの王様」の称号を獲得する。その後、指導者としての彼は、それまでは街頭でパスイスタ (パッソの踊り手) 同士の「眼差しの交換」(p.73) による相互研鑽、継承が行われてきたのに対し、学校という枠組みの導入によって「カルナヴァルの街頭という時空間に限定することなく」(p.77) パッソの指導、継承が行われることを目指したのである。

ここで重要だと思われるのは、学校化に継いで生じたカルナヴァルの隊列化である。筆者も指摘するように、

これは、民衆の密集状態であるオンダ (onda) からの踊り手の隔離を指す。カルナヴァルの街頭行進にて浮かれ騒ぐ民衆の密集状態にパッソが呑み込まれてしまい、結果的に将来的にはパッソというダンスが消失してしまうことへの懸念がこの背景にはある。しかし、踊り手が隊列に組み込まれることによって、パッソが有する本来的な魅力である個々のパシスタの自発性、即興性を減らすことへの懸念もまた新たに出現するのである。

本書のハイライトのひとつである本章第4節では、ナシメント・ド・パッソ本人の協力を得て記録したビデオ映像を用いて、パッソの技術的側面に関する詳細な分析が行われている。筆者は、姿勢、反復周期、左右の切り替え、足関節の屈曲・伸展、両脚間の傘通しという5つの視点を設定し、現地調査で確認した実に92種類におよぶ身体動作を分類している。表2-3 (pp.104-5) を中心に、計7つの表にまとめられた分析の結果は、本書のなかでもひとときわ精彩を放つ。筆者が行ったパッソの記譜は、いわば脱身体化されたテキストとして、パッソの指導、継承に大きな貢献を果たすものであろう。筆者によるこれらの表が学校側から求められ、指導者用の正規の教材となる可能性は考えられないだろうか。

第3章「フレーヴォの市立学校の活動実践」では、1996年に設立されたパッソに関する公立の指導組織「フレーヴォの学校」が取り上げられる。設立当初の目的は、ベルナンブーコ州の民衆文化の地元民への継承と普及にあったのに対し、2000年代後半にはここに、踊り手と指導者の養成、生徒の能力の開発、社会的包摂と所得の創出が追加されている。ナシメント・ド・パッソの教えを発展的に継承するこの学校に筆者は計6回訪問している。およそ8メートル四方の、参加人数に対して決して広いとは言えないフロアでの練習に汗を流しながら筆者が得た知見のひとつに、クラスの時間の最後に設けられた独演がある。初心者か熟練者かを問わず参加者全員が行うことになっている。いかに「集団演技」や「振り付け」の概念が導入されたとしても、パッソの本質は即興性、独創性があると学校側が理解しているからこそ、独演の時間が設けられているのではないかと筆者はそう推論する。

第4章「フレーヴォの継承に向けた『パッソの戦士たち』の取り組み」では、ナシメント・ド・パッソに心酔する彼の教え子たちによる組織「パッソの戦士たち」の活動実践が「フレーヴォの学校」と比較される形で検討されている。2005年に結成されたこの組織は、舞台にも活動の幅を広げる「フレーヴォの学校」とは異なり、「街頭で踊られるパッソ」にこだわり続ける。一方で、パッソの身体動作を伴わないウォーミングアップとクーリングダウンの導入や、独演を重視する点は両者に共通する点である。

興味深いのは、「フレーヴォの学校」では年齢別、技能水準別のクラス分けが行われていたのに対し、「パッソの戦士たち」では参加者全員が「横並び」で同一の

内容を実践する点である。筆者はクラスに自身が参加する中でこの点に疑問を覚え、教師の1人に対して技能別のクラス分けを示唆する質問を投げかけたが、十分に納得のいく回答は得られなかったという。ダンスクラスを開催する側として、技能水準別のクラス分けをするかどうかについては、評者も自身のフィールドで、日々、試行錯誤を繰り返している。この点について、ぜひ筆者と意見を交わしてみたい。

ここまで、各章の内容を見てきた。「良い旅をさせてもらった」というのが、読後の率直な感想である。この感想は、本書で紹介されたジョアキン・ナブーコ財団の運営するwebサイト「ヴィラ・デジタウ (Villa Digital)」における数々の写真 (アメリカの文化人類学者カタリーナ・レアウによる、1950～90年代にかけてのベルナンブーコ州の民衆芸能のコレクション) や、インターネット上にアップされた現代のパッソの様子を見ることで、さらに色濃いものになった。評者がみた限りでは、「フレーヴォの学校」を映したものと思われる動画もあり、ほんのわずかではあるが、現地における筆者の足跡を追体験させてもらった気になった。良質なエスノグラフィーには、読者の意識を旅に連れ出す力が宿っているのである。

本書は、レシーフェという、世界の中の特定の地域における民衆舞踊の継承の姿を、関係者に対する丹念な聞き取り、そして、筆者自身による踊りの場への参与を通して明らかにした労作である。ナシメント・ド・パッソという「レジェンド」を筆頭に、現地でパッソの指導にあたる教師たち、参加者たちと同じ空気を吸い、著者が、現地でパッソの歴史を身体化させた証が随所に散りばめられている。それは、本文中に頻繁に挿入される () 内の補足や、各章末の分厚い注に端的に表れている。

長期にわたり現地に身を置き、人びとと話をし、踊りに参加する中で感じたことを言語化することにより成立したこの研究は、「レシーフェ」、「フレーヴォ」、「パッソ」といった特定の地域、特定の音楽、特定の踊りの枠を越え、より一般的な論点へと読者を導く力を持っている。

一例を挙げるならば、学校を通じた指導の合理化による踊りの画一化であろう。筆者は控えめな表現に留めているが、これは、本書を通読した者に力強く響く筆者からのメッセージである。「見世物化(舞台化)」、「集団演技」、「継承」等の文脈において、パッソの独演に生気を与える自発性や即興性が失われることへの懸念である (p.98, p.113)。これは、民衆舞踊に分類しうるあらゆる舞踊が共通にたどる道なのだろうか。舞踊研究者たちが身体化させたそれぞれの舞踊に関する状況と本書の議論を照らし合わせるとき、「舞踊の見世物化」という一般的なテーマに対する新たな知見が提出できるかもしれない。このことに胸躍らせるのは評者だけではないはずである。

(溪水社、2019年11月刊行)